

視覚障害者の住環境における工夫 1

—住宅内で使用している支援機器を中心に—

○水野智美
(筑波大学医学医療系)

徳田克己
(筑波大学医学医療系)

河田正興
(岡山ライトハウス)

KEY WORDS: 視覚障害 住環境 工夫

(目的)

全盲で独り暮らしをしている者あるいは夫婦ともに全盲で夫婦のみで生活している者は、視覚を使わなくても安全に、快適に暮らしていけるように様々な工夫をしている。ただし、それらの工夫は視覚障害者の間に情報として広く伝わっているわけではなく、個々人の工夫として、仲間内の狭い範囲で共有されていることが多い。

そこで、今後、視覚障害者の住環境が向上するための基礎的資料を得ることを目的として、独り暮らしあるいは夫婦のみで生活している全盲者に対してヒアリング調査および居室への訪問調査を行い、住環境への工夫を明らかにしたいと考えた。

(方法)

①調査対象者

独り暮らしあるいは夫婦のみで生活している全盲者 25名を調査対象とした。

②手続き

調査対象者のうちの 10 名の家庭を訪問し、住環境における工夫を確認するとともに、工夫に関する話を伺った。訪問調査の時間は 1 名につき約 1 時間であった。また、残りの 15 名には直接ヒアリング調査を行った。ヒアリング調査の時間は 1 名につき 30 分～1 時間であった。なお、本研究は筑波大学医学医療系医の倫理委員会の承認を得て実施している (承認番号: 1146)

(結果)

①音声ガイド付きの電化製品の使用

そもそも視覚障害者は視覚に頼らないため、音声による手がかりを利用して生活しているが、調査対象者の多くが、何らかの音声ガイドが付いた電化製品を使用していた。使用している音声ガイド付きの電化製品には、エアコン、テレビ、炊飯器、電磁調理器、体重計などが挙げられた。たとえばエアコンは、リモコンのボタンを押すと、「暖房運転を開始しました」「23 度に設定しました」「運転を停止しました」などと音声で情報が流れるようになっており、運転切り替え、風量、風向、電源などのすべての情報を細かく音声でわかる仕組みになっていた。

ただし、男性や 60 代以上の女性の中には、音声ガイド付きの製品は音声ガイドがない製品に比べて価格が高いことや使いこなすまでに時間がかかることから、音声ガイドが付いていない物を購入していると答える者が目立った。また多くの人が、できるだけ機能が単純化されていてボタンが少ない製品を選ぶ、自分でボタンの上に点字シールを貼っておきボタンを押す際に点字シールで確認する、ダイヤル式のつまみをどの位置まで回せばよいかのかわかるように適度な時間のところに突起のシールを貼っておく、時間設定がダイヤルであり、どこまで回せばよいかのかわからない場合にはキッチンタイマーを併せて使用するなどの工夫をしていた。

音声によるガイドはないが、ボタンを押した際にピッと音を手がかりにしていると答える者がいた。たとえば、電子レンジの調理時間は、10 分、1 分、10 秒の区別のボタンがあり、それぞれのボタンの上に点字シールを貼って

おき、ボタンを押した際になる音を手がかりに自分が望む時間に設定すると述べていた。

②視覚障害者用音声ガイド付き支援機器の使用

40 代以下の比較的若い世代の中には、視覚障害者用に開発された音声ガイド付きの支援機器を積極的に使用している者がいた。たとえば、シールにボイスレコーダーをあてて録音しておき、後でそのシールにボイスレコーダーをかざすと、録音した音声流れる仕組みになっている「タッチ式ボイスレコーダー」を使用している者がいた。たとえば、ガス台のボタンに録音したシールを貼っておき、ガスの着火時に確認していた。それは、魚焼きグリルのボタンを間違えて押してしまっても、ガス台のコンロに点火されていないため、火をつけたことに気がつかずに放置してしまうことを防ぐためであると答えていた。

色を判別する機器を使用する者がいた。色を知りたい物にその機器をかざすと音声で答えてくれるため、クローゼット内の洋服を探す際に使用していたり、部屋の中の電気が消えていることを確認するために使用している者がいた (なお、電気がついている時には、その機器を電気の方にかざすと、「白い光」などと音声が出るようになっている)。ただし、手持ちの洋服は、布地の手触りや形などで、ある程度は何色であったのかを思い出せるため、機器を購入してもほとんど使っていないと答える者が目立った。

また少数であるが、バーコードリーダーを使用している者がいた。あらかじめバーコードリーダーとパソコンを接続させておき、商品のバーコードをバーコードリーダーで読み取らせると、詳しい商品情報がパソコン上に現れ、それを音声で聞くことができる仕組みである。レトルト食品や飲み物など、手で触っただけではわからない商品について、バーコードリーダーを通すことによって、区別できるようになったと答えた。

③ボタンの工夫

タッチパネルの物、ボタンが一つひとつ区切られていない物、ボタンを押したことがわかりにくい物、少し触れただけで反応してしまう物は、できるだけ使わないようにしているとほとんどの者が答えていた。ただし、どうしてもそれらを使用しなければならない場合には、点字シールやシリコン製のシールをパネルやボタンの上あるいは側面に貼るようにして、間違いを防いでいると答えていた。たとえば、マンションの玄関のカギがタッチパネル式であった者は、パネルの上および左右の側面にシリコン製のシールを貼っていた。具体的には、3 行×3 列の数字がパネル上に書かれていたが、行と列を示す場所にそれぞれ 3 つずつのシールがあり、それを手がかりに数字を認識できるようにしていた。

また、運転開始のボタンが他よりも大きなサイズになっている物を選ぶ者、使用する頻度が高いボタンのみに突起のシールを貼っている者がいた。

付記: 本研究は平成 29 年度公益財団法人「LIXIL 住生活財団の調査研究助成」を受けて行った。

(MIZUNO Tomomi, TOKUDA Katsumi, KAWATA Masaoki)